

人生の主は誰か

梅雨入りをして1, 2度雨が降ったが、その後は晴天が続いている。空気が澄んで、森の木々が一本一本くっきりと輪郭を際立たせ、吹き渡る初夏の風は緑色の微細な粒子をたっぷりと含んでいるようだ。

6月は全県総体、玲瓏祭と大きな行事があり、これから期末考査が始まる。総体では端艇、男子弓道、ソフトテニス個人、陸上女子100mが伝統の力を発揮してインターハイへの出場を決めた。硬式野球部は春季選抜大会で地区大会、全県大会と決勝まで勝ち上がり、ともに準優勝となった。文化部では放送部が県を抜け、全国コンクールへの出場を勝ち取った。どの部も右文尚武の校標に恥じぬ立派な成績を残した。

みんなが学校行事や大会で忙しく毎日を送っている様子を一番身近で見守っている保護者が集まって、先日1, 2年生のPTAが行われた。学級懇談の話題で多かったのはケータイやスマホの使い方だったようだ。

情報通信技術の進歩は日進月歩であり、数年前には予想もできなかったような技術が当たり前になる時代だ。さまざまな機能を持つ携帯電話も、今や進化から取り残されたガラパゴス携帯などと揶揄され、ほとんどパソコンに近い機能を持つ次世代型携帯電話がスマートフォンとして、急速に普及している。

スマホはインターネットの使い勝手がいいのが特徴で、ソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)によって、特定・不特定を含む様々な人とのつながりを構築するコミュニケーションのツールでもある。本高生も多くがスマホを所持し、スマホが少なからず、学校生活に影響を与えている。玲瓏祭のクラスデコで1年D組とE組がスマホを題材に取り上げて、危険性や使用のルールについて当事者としてなかなか鋭い切り口で迫っていた。



「食事中もスマホを離さない」「複数のラインのグループに所属して盛んにやりとりをしている」「メールの返信にかなりの時間を費やしている」「中毒と感じるほど使っている」等々の心配の声がPTAで保護者からは伝えられた。

ある評論家は、ケータイが日本を滅ぼすとまで言っている。みずみずしい感受性と感性を育むべき高校時代に、中毒と思われるほどスマホやケータイにのめり込んでいるとすれば、豊かな言葉やのびやかな想像力の獲得や、深い思索の時間を奪われて、そこに残るのはぎすぎすした言葉や短絡的な発想や、バーチャルリアリティーの中にしか居心地の良さを見つけられない歪められた認識であろう。

本高生よ、試しに2, 3日スマホをもたずに生活してみたらどうか。初めは違和感があるが、すぐに慣れる。これまでこんなものに支配されていたのかと思うかも知れない。

本高生よ、諸君の人生の主は誰か。自分の人生の主人は紛れもなく自分であって、スマホではない。自分の人生がスマホに従属させられていないか、冷静に見つめ直してみるといい。豊かさは、バーチャルではなく、現実の世界にこそある。